



関西高校ありがとう

英語科 森川幸夫

高校時代三年間、教員として三十七年間、トータルで四十年間関西高校にはお世話になりました。だから、とにかく「ありがとう関西高校」という気持ちでいっぱいです。私は、関西高校に育ててもらった、という思いが強いんです。自分が生徒を育てた、という気持ちはあまりないんです。

私は、第二コース科というコースの第一期生として入学しました。今は、もうこの科はありません。同じ科には、浪人生もいたので、二歳年上の同級生もいました。クラスの四分の一が年上だったと思います。表向きの倍率は三十一倍だった。私は、自分が受験した朝日高校にまさか不合格になると思わなかった。だから、合格発表を二度も観に行つたくらい。それくらい自分の不合格が信じられなかった。当時、岡山四校は角帽だった。だから、私は関西高校の帽子を自分で縫い付けて角帽にしたくらい。それくらいシヨックだった。認めたくなかった。

でも、関西高校に入学してみると、

楽しくて仕方ない。勉強ばかりだったけれど、本当に楽しかった。クラスメイトとも心の付き合いができた。卒業生名簿を見てもらつたらわかりますが、進路はすごい。勉強するときは勉強するけど、スポーツをするときは、本気でスポーツをしていた。そこには本当の協調性があったし、遊びも楽しかった。ただ仲良くやろう、じゃなくて、みんな一緒に目標に向かっていて、互いの成功を讃え合っていた。

最初は、年上のクラスメイトを「さん」付けで呼んでいたが、そのうちに打ち解けていった。絶望的な気持ちで入学した関西高校だったけれど、充実していたからこそ、卒業するときは本当に寂しかった。

柔道や剣道が強かった。同じクラスには、剣道部のキャプテンもいて、インターハイにも行った。運動部の生徒たちとも仲が良かった。皆、県立高校には負けられない、という気持ちがあった。

学校の帰りには、ソフトボールをやつ

たりしていた。コンビニもなかったから、駄菓子屋のお菓子を沢山持ってソフトボールをやっていた。

大らかな時代で、先生たちにいろんなことを許してもらって、先生たちとも仲良くて、大らかだった。

「College」というのは「教育する」という意味だけれど、「引き出す」という意味もある。生徒一人ひとりに対して、天分のきつかけを関西高校が引き出してくれたと思う。

一年目はラグビー部、二年目は軟式野球部の顧問になった。その軟式野球部で、今は亡き石井先生、井関先生から本心に部活の楽しさを教えてもらった。その年、関西一〇〇周年の年ですが、井関先生が硬式野球部の顧問になられた。だから、軟式野球部は石井先生と私で、岡山県大会の決勝で、七回で「勝った」と思ったら同点になって、九回で「勝った」と思ったら、また同点になって延長十二回でさよならフオアボールで負けたんですよ。そのときに、当時、二十四、五歳だった私は、生徒から泣きながら先生ありがとうございました、と言われたのは、忘れられません。

その後、井関先生が硬式野球から戻ってこられて、当時の電気科科長の岡本先生から「ボート部をなんとかしてほしい」と言われていったのがきっかけ

で、以来、ボート部に携わることになったんです。最初は「ボート」と聞いても「競艇」のイメージしかなかったし、わけもわからず、川の練習場に行つたのを思い出します。どこで練習しているかも知らなかったし。

初めて行つたときは、驚きました。関西高校の部員は五名ほどいて、操山とか東商業とかの部員もいました。ボートもなかった。練習はどうやっているのか、と質問したら、県立高校が練習を終えたあと艇を借りて練習しているというのでした。色々必要なものを借りて、県大会には出場していたようです。もちろん、結果は散々です。

そこで、私自身も、部員らと一緒にトレーニングを始めることにしたんです。それなりにチーム内のルールを作つた。ルールもない無法地帯だった。近隣住民からも嫌われていたので、叱責、非難を受けていました。だから、挨拶をすることや、地域住民に愛される存在になることも。「此処で練習をさせていただいている」ということを忘れないうというのを徹底した。

それまでは、「勝つ喜び」さえ知らなかった部員たちでしたが、平成元年に、船もオールも全部用意して、何だか分りませんが、県大会で初めて勝つたんです。「おまえら、これ、勝つたらイ

ンターハイに行くんだぞ。わかつてるか？」という感じでしたが、嬉しくて、翌朝、新聞を見て、泣きながら車を運転したのを思い出します。彼らにとつてもはじめて「やればできる」ということがわかった。

そこから、愛媛のインターハイに行きました。わけもわからず見様見真似で練習して、勝つてしまつて、インターハイに来たのは良いが、そこでも恥をさらしました。ボートは艇をセッティングするのに工具を持っていかなければならないのですが、それも知らなかった。試合会場で公式練習が行われるこ

とも知らない、誰も教えてくれないから。ユニフォームも知らない。短パンに、量販店の黒いTシャツに胸にアツブリケで「KANZEI」と入れて、背中に、部員たちの好きなローリングストーンズを入れて行つた。その時、私は全国高体連からひどく叱られたんです。「君は、ボートをどう考えているんだ」と。何も知らなかった。誰も教えてくれなかった。試合結果はぶつちぎりの負けでした。予選も、敗者復活戦もボロボロに負けましたが、でも、彼らは、夢にまで見た全国大会に来れた。

二年目も県大会では優勝できたけれど、宮城インターハイではまた負けました。レベルは低かった。控えテン

トで「あんな弱いチーム出場しなればいいのに」と他校の生徒に笑いながら言われたことは忘れられません。その時は、ユニフォームも準備していましたが、関西高校の部員たちは、「KANZEI」のロゴの入ったTシャツを着たくないと言っていました。恥ずかしい、と。結果はボロ負けだから仕方ない。

それが、私のスイッチオンでした。彼らに誇りを持たせてやりたい、俺の責任だ、と。それで、私は自分でボートの勉強に行くようになりました。部員も外に出すようになりました。県内ではわからないし、教えてくれないので、琵琶湖や戸田ボート場に行つて、色々教えてもらうようになった。したことがないからいろんなものが入つてきた。サムシングニュー。知らない世界ばかりだった。生徒の意識も変わつていつて、少しずつ勝てるようになりました。

そして、平成九年に、全国優勝をしました。実はこの時、日本一になつたら辞めてやろう、と思つていた。マスコミからは「突然変異のように強くなった関西高校」という表現をされた。映画の出演依頼もきました。国体の出発二日前まで映画のロケをしていたんです。

ところが、平成十年に自分が腐つていつているのがわかった。なかなか自分のエンジンがかからなくて、自分がつまらない人間になつてくる気がしていた。私自身について、苦悩していたころでした。

平成十六年の秋は苦しかった。そして、疲労とプレッシャー、ストレスで病気になつたんです。メニエル病になつて、練習中に、自転車ごと川に落ちてしまふ、と思つたくらい空が回つて、しばらく、河川敷の草の中で倒れていたこともあった。

そして、平成十六年二〇〇四年から国体六連覇。埼玉、岡山、兵庫、秋田、熊本、新潟で優勝しました。その後沖縄・岩手のインターハイで優勝。八年連続、日本一を獲得しました。国体五連覇目の時、がん宣告を受けたんです。手術をうけたあと、「森川はダメだ」という噂が流れていることを知つて、それが悔しくて、また自分にスイッチが入つた。歩くのがリハビリだから、退院後はすぐに河川敷を歩いてきた。そのときに、この子たちをもう一度勝たせてやりたい、と思つたんです。入院前に、色々なストレスから、部員たちに、つい「なんで、俺がこんなことにならにゃおえんのじゃー」と心無い言葉を投げつけてしまつ

たことがあつて。また、応援してくれる方々はいつも「がんばつて」と言ってくれるが、それに対しても「簡単に言うけど、現場はかなわんのじゃ」と言いたくなつたこともある。

そのことを今でも反省しているし後悔している。それもあつて、猛烈に、彼らを「勝たせてやりたい」と思つた。

結局、六連覇まで達成して、七連覇できませんでした。もちろん、勝ちたかつたのですが、負けてホツとした自分がいたんです。これまでしばらく、勝ち続ける関西エクスプレスから降りれなかつた。やつと負けた、とほつとした自分がいたんです。このことを「実は……」と何度か部員たちにも話したことがあります。

面白いもので、国体六連覇達成後、準優勝、三位、四位、とひとつずつ落ちていった。でも、令和の最初の優勝が欲しくて、勝ち取つた。そして今回、私のラストイヤーで、思い出の地、愛媛で優勝させていただきました。

入部して間もない時期に「森川ラストチルドレンとして、必ず勝ちます」と宣言してくれた部員たち。それを、実現してくれた。関西高校ありがとう！

If you can dream of it, it comes true.
(思えば叶ふ)